

難聴

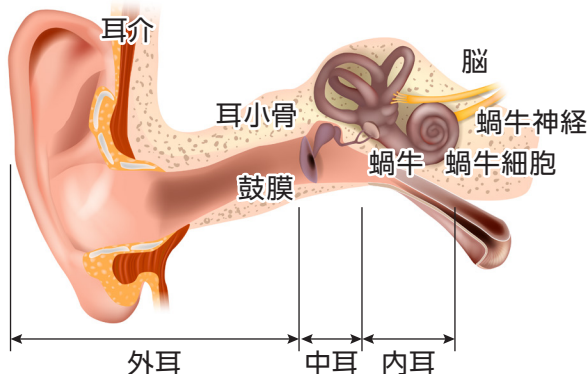
「難聴」とは、音が耳に入ってから脳に伝わるまでのどこかの段階で障害が起こり、音が聞こえにくい、言葉が聞き取りにくい、あるいはまったく聞こえないといった症状のことをいいます。健康診断受診者のうち約1割が聴力検査にて指摘を受けています。



■ 耳の構造

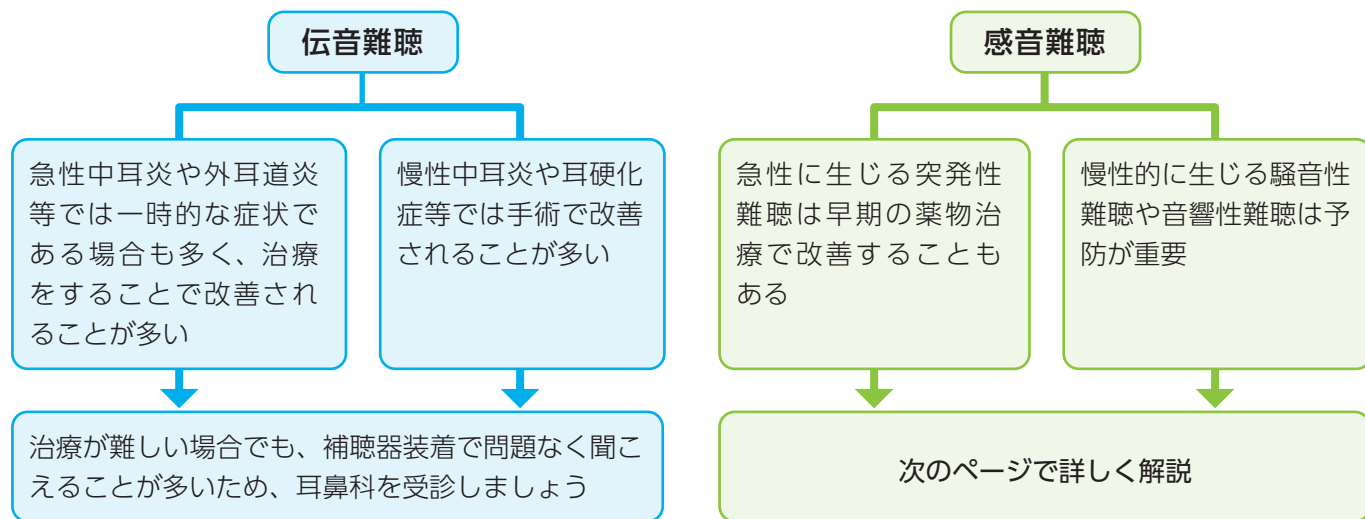
耳の構造は、「外耳」「中耳」「内耳」の3つに大きく分かれています。

外耳と中耳は音を伝える役割をしており、内耳は音を感じて脳に伝える役割をしています。これらのどこか、あるいは大脳の聴覚中枢に障害が起こると、難聴を発症します。



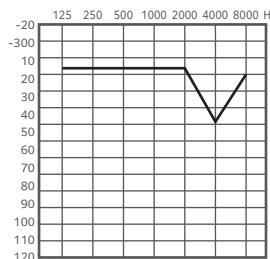
■ 種類

難聴は、外耳と中耳の障害によって音がうまく伝わらない「伝音難聴」と、内耳や脳に問題があり音をうまく感じ取れない「感音難聴」の2種類に分けられます。



C5dip

内耳の構造的特徴により高音域の4000Hzを感知する部位から傷付けられるので、高音から聞き取りづらくなります。そのため騒音性難聴になった方の聴力は4000Hz付近が低下します。(V字)
そのような方には耳鼻科の受診をお勧めしています。



【参考文献】 難聴について | Hear well Enjoy life. - 快聴で人生を楽しく - | 日本耳鼻咽喉科学会 (jibika.or.jp)
突発性難聴について | e-ヘルスネット (厚生労働省) (mhlw.go.jp)
そのめまい危険かも?メニエール病の症状チェック、原因や治療法は | NHK 健康チャンネル
職場における騒音障害防止対策の推進について - mhlw.go.jp
騒音障害防止のためのガイドライン 001195349.pdf (mhlw.go.jp)
ヘッドホン難聴 (イヤホン難聴) について | e-ヘルスネット (厚生労働省) (mhlw.go.jp)

■ 感音難聴の種類

近年問題になりつつあるのが「感音難聴」です。職場環境や私たちが身近に利用しているものでも難聴になる危険性が潜んでいるのです。

種類	原因
突発性難聴	突然、耳の聞こえが悪くなり、耳鳴りやめまいなどを伴う原因不明の疾患です。40～60歳代の働き盛りに多くみられ、ストレスや過労、睡眠不足、糖尿病などがあると起こりやすいことがわかっています。
騒音性難聴	主に、職場で工場の機械音や工事音などの騒音にさらされることで起こります。
音響性難聴	爆発音あるいはコンサート・ライブ会場などの大音響などにさらされるほか、ヘッドホンやイヤホンで大きな音を聞き続けることによって起こります。
メニエール病	内耳に正常に存在している液体の量が過剰になることで起こると考えられています。この病気は一般的には40～60歳女性に多く発生します。回転性めまい（自分や周囲が動いたり回転したりしているような感覚）の発作が繰り返し起こる、耳鳴り（耳鳴）、低音が聞こえづらい等が特徴

■ 感音難聴の治療法

難聴初期には耳栓を使う、定期的に耳を休ませるといった指導が行われます。

大音響などを聞いたあとに急に耳の聞こえが悪くなったときは、突発性難聴の場合と同様に、内服や点滴のステロイド剤による薬物療法が中心になります。メニエール病には、抗めまい薬や制吐薬、利尿薬なども使用されます。ただし、これらを行っても聴力が十分に改善しないこともあります。

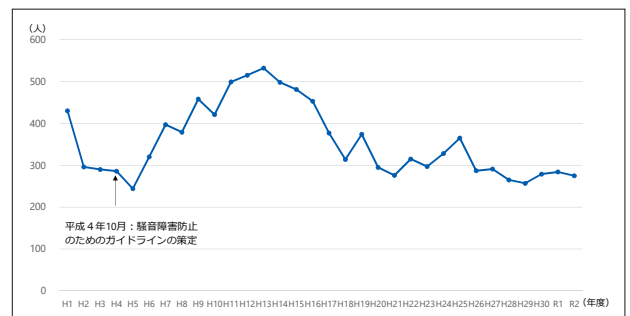
■ 予防

- 日常的な騒音には耳栓をする
- ストレスをため込まないようにする
- 適度な運動で血液循環をよくする
- 音楽を聴く際は音量を下げたり、連続して聞かずに休憩を挟んだりし、イヤホンの使用は1日1時間未満にする（WHOより）

■ 騒音性難聴の労災認定状況

近年、騒音性難聴による新規労災認定者数は年間300人程度で推移しています。

業種別では、建設業（約52%）、製造業（約26%）、鉱業（12%）の順に新規労災認定者数が多いです。



■ 騒音管理区分と措置（工場などで作業をする上での作業環境を表すもの）

騒音管理区分	措置
第Ⅰ管理区分 (等価騒音レベル 85dB 未満)	作業環境の継続的維持に努めましょう
第Ⅱ管理区分 (等価騒音レベル 85dB 以上 90dB 未満)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて聴覚保護具（耳栓等）を使用する ・ 当該場所が第Ⅱ管理区分であることを明示する等の措置をとる（標識）
第Ⅲ管理区分 (等価騒音レベル 90dB 以上)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 聴覚保護具着用の必要性を見やすい場所に掲示し、利用する ・ 当該場所が第Ⅲ管理区分であることを明示する等の措置をとる（標識）